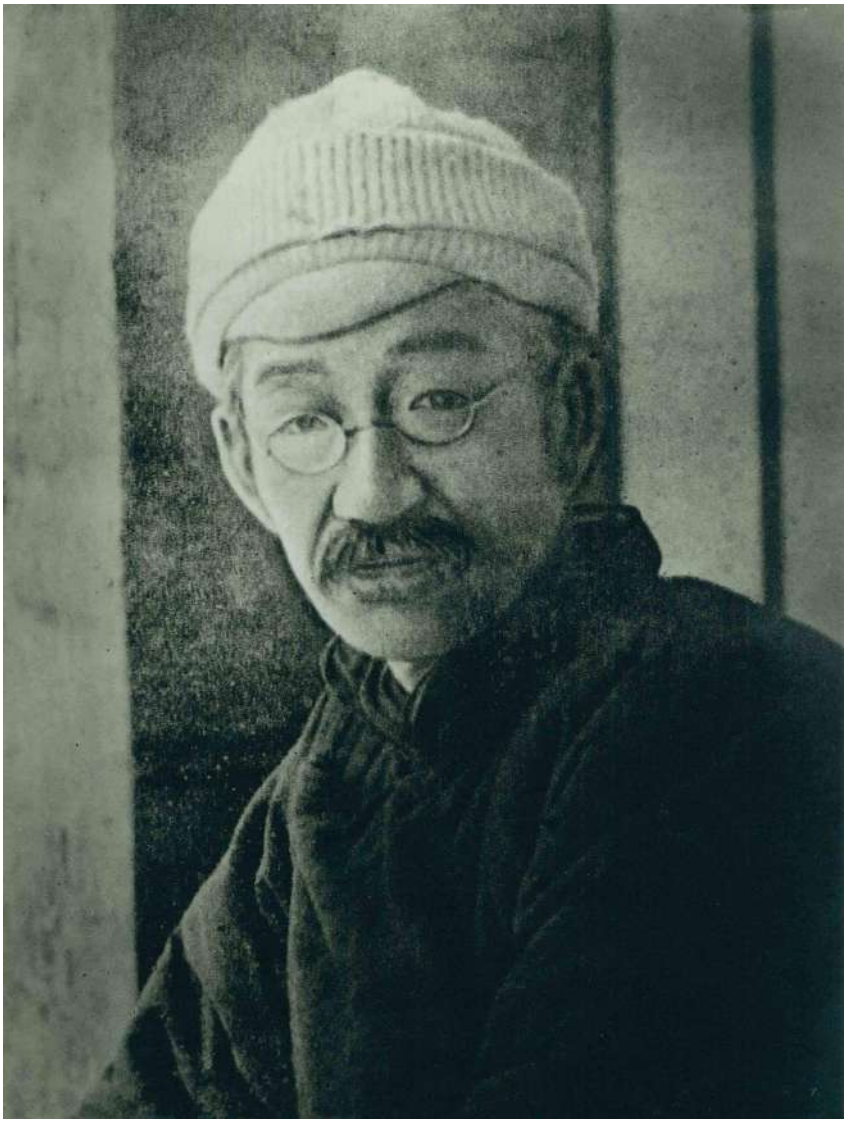
HP　縦走路・石室100周年記念特設ページ

（プロローグ）

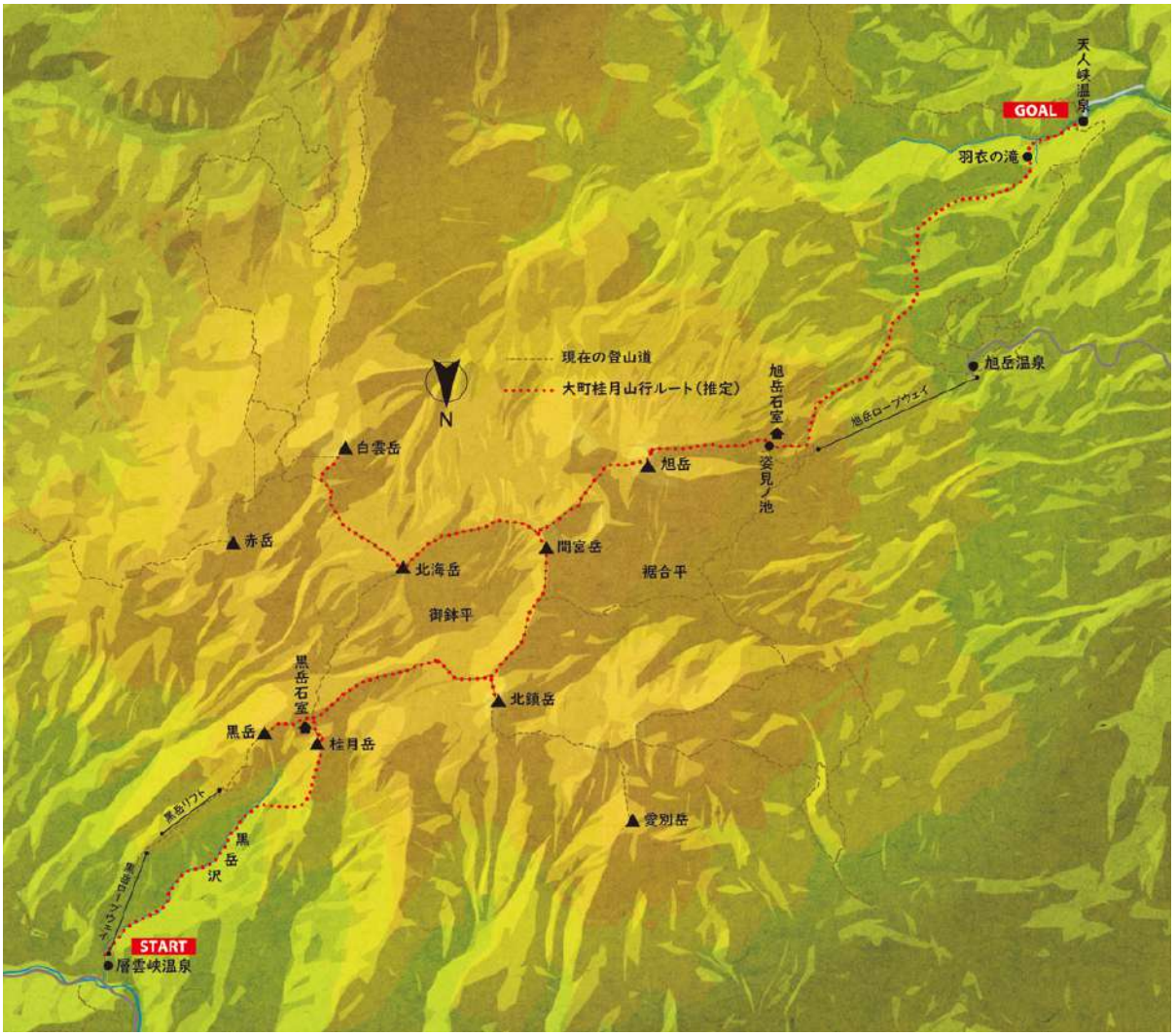
2023年、黒岳～旭岳縦走路開削・石室避難小屋建設から100年を迎えます。
100年前の1923年（大正12年）、未だ山深い秘境であった大雪山。高知県出身の文人・大町桂月がこの大雪山の素晴らしさを紀行文で広めたことで、今ではその美しい山容を求めて多くの人が訪れる地となりました。
大雪山と黒岳ロープウェイの100年の歴史を一緒に振り返ってみましょう！



大町桂月（写真提供：十和田市　大町桂月を語る会）

1921年（大正10年）
大町桂月、層雲峡から黒岳・旭岳天人峡踏破

1869年（明治2年）に開拓使が設置され北海道の開拓が進む中、秘境の地とされていた大雪山に憧れを抱いた大町桂月。当初、松山温泉（現在の天人峡）から旭岳往復の山行を計画していました。
人気作家の桂月が大雪山に来ることを聞きつけた塩谷温泉（現在の層雲峡温泉）の若主人・塩谷忠は、桂月に「スタート地点を霊山碧水峡（現在の層雲峡）、ゴール地点を松山温泉」にするよう熱く働きかけ、それが実現することとなりました。
1921年（大正10年）、桂月一行は層雲峡から黒岳沢を登り詰め桂月岳・黒岳・御鉢平をまわり、北海岳～白雲岳～旭岳と足を伸ばし、最後に松山温泉（天人峡）に下りるという、道なき道を行く3泊4日の大縦走を成し遂げたのでした。
この大縦走の際、桂月はアイヌ語の地名「ソウウンベツ（滝のある川）」にちなんで、山行のスタート地点である霊山碧水峡を「層雲峡」と命名。さらに紀行文「層雲峡より大雪山へ」で桂月は、”富士山に登って、山岳の高さを語れ。大雪山に登って、山岳の大いさを語れ。”と語り、のちにこの名フレーズが大雪山と層雲峡の名を全国へ広めることになったのです。



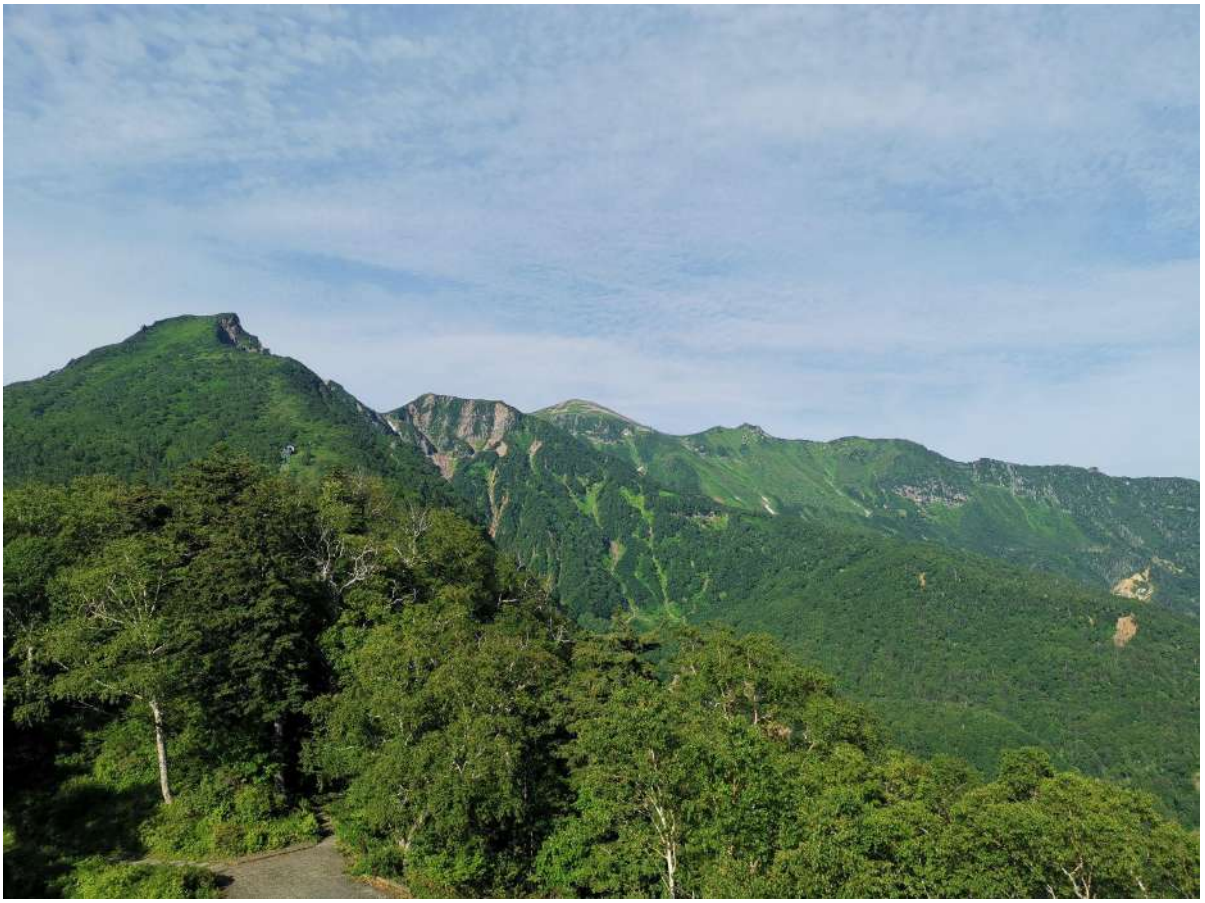
桂月一行が歩いた層雲峡～天人峡ルート

石室建設当時の様子の絵葉書（発行：大雪山調査会）

1923年（大正12年）

層雲峡から旭岳へ。登山道開削開始！

大雪山の知名度を高めた桂月の旅から2年後、北海道山岳会の働きかけにより
黒岳石室・旭岳石室という石積みの山小屋2棟が建設されます。
同時に、桂月が歩いたルートをもとに、
層雲峡登山橋脇を起点にして、黒岳～黒岳石室～北鎮岳～旭岳～旭岳石室を結ぶ登山道が開削され、ついに大雪山を貫く大縦走路が開通したのです。



黒岳ロープウェイ5合目駅舎展望台からの眺め

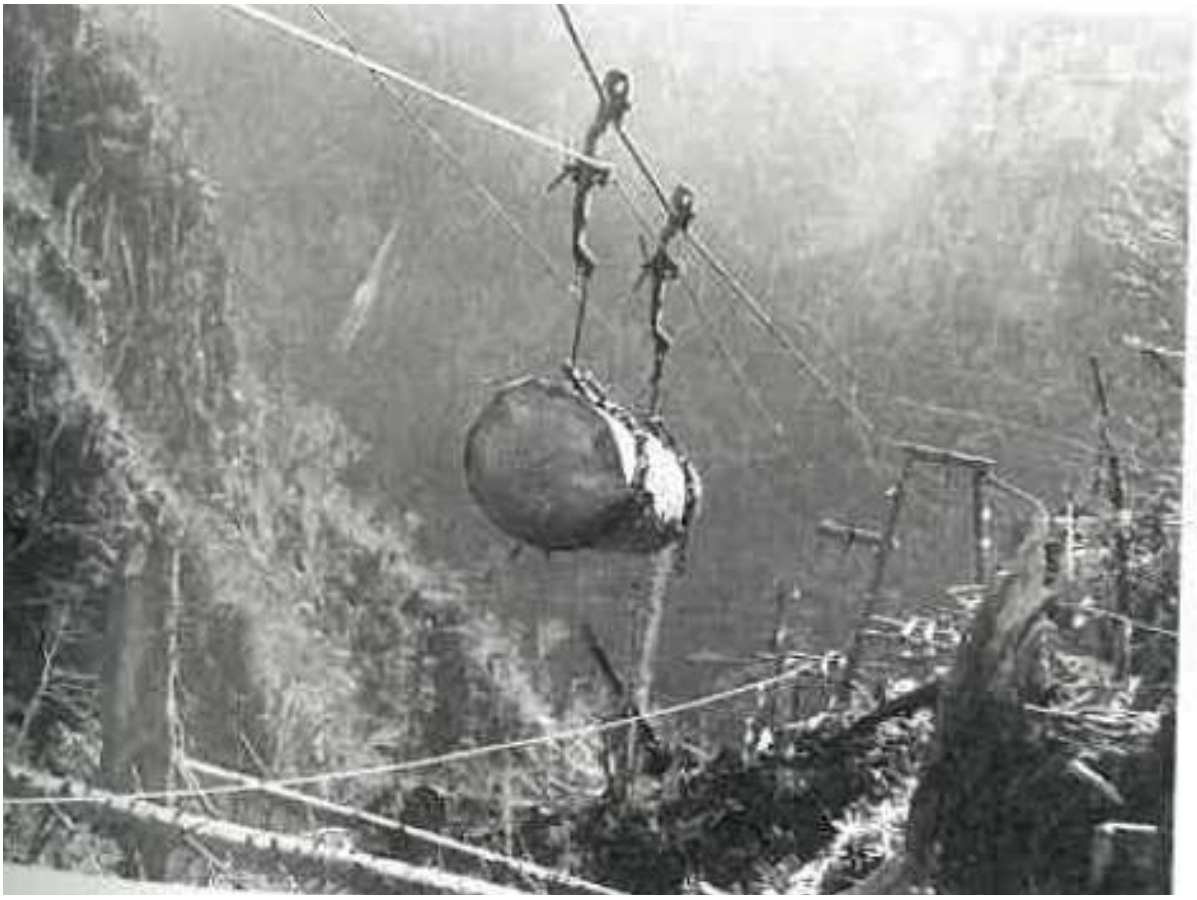
桂月岳から見た石室の賑わい

1934年（昭和9年）

豊かな自然を守り、後世へ伝えて行くため、「大雪山国立公園」として認定される。

大雪山の特異な山岳景観や多種多様な生態系を保護するため、1934年（昭和9年）
12月4日、黒岳や旭岳からトムラウシ山、十勝岳連峰、石狩岳連峰などを含む大雪山全体が「大雪山国立公園」として指定されました。
この広大なエリアの総面積は226,764ヘクタール。日本で最も広い国立公園です。

台風による風被害の様子
（写真提供：一般社団法人日本森林技術協会北海道事務所）



現在のロープウェイの前身である貨物索道による倒木運搬
（写真提供：一般社団法人日本森林技術協会北海道事務所）

1954年（昭和29年）

原生林の6割をなぎ倒した洞爺丸台風

９月２６日～２７日にかけて、巨大な台風１５号（洞爺丸台風）が北海道を襲いました。
強烈な暴風によって多くの人命や家屋が失われ、森林地帯も大きな被害を受けました。
中でも上川営林署・層雲峡地区は年間伐出量の54年分にあたる5,110千㎥もの甚大な被害を被り、生い茂っていた原生林は北面・北東面の急斜地が残っただけで、緩斜地では殆ど無立木地に一変してしまいました。

黒岳ロープウェイ開通当時の様子

1967年（昭和42年）

倒木の運搬から観光・保全へ

洞爺丸台風被害の倒木処理～黒岳ロープウェイ開通

台風の後、国をあげての倒木処理に人々が集まり、運搬のための貨物用索道（現在の黒岳ロープウェイ）が作られました。同時に三国峠や石北峠など搬出に必要な道路も整備され、大量の木材が全道・本州へ運ばれました。やがて倒木処理が一段落すると、復興で沸いた近隣の町は縮小の一途を辿ります。そこで新たな観光資源として大雪山の山岳美を広めたいとの声が上がり、黒岳の貨物用索道を観光用索道として北海道林友観光（現りんゆう観光）がロープウェイを建設することとなったのです。

桂月岳山頂から、黒岳越しのご来光

現在の石室

2023年（令和5年）
あれから100年、黒岳は今。

この100年の間、台風被害やロープウェイ・リフトの建設、登山者増加による登山道侵食・トイレ問題、新型コロナウィルスなど様々な時代や状況の変化の中、表大雪の重要な登山基地としての役割を果たし続けています。
また黒岳石室は北海道では貴重な管理人常駐（※夏シーズンのみ）の避難小屋として、多くの登山者を迎えて賑わいを見せています。